③

15上

推薦

作家

火野葦平

石炭が掘りだされて、若松港から出すやうになつたのは、幕末時代からである。だから、若松港は日本一の石炭積出港となつた現在でも、その歴史のかげをいれるところに止めてゐる。古いそれと新しいそれとの混淆が、不器識な調和を示してゐるのだ。洞海湾の一角を遮断したこの官兵にも、古代、幕末、明治、大正、昭和と、さまざまのそれの残つた港の雰囲気をつくりだしてゐる。

古代の

伴よく雑居して、稀有の

かういふ場所へ、ぽつかりと嵌めてまいれて、金子鈴恵君は、すこしも違和が感じられないところが面白い。古い時代の習俗に生まれ、新しい教育を受けた世代の その複雑な表情が、若松港の背景とぴつたりしてゐるせいであらうか。白と黒とのくつきりした意識、彼女が好きといふ。どうやら、港の海の青の色とともに、それには尺られぬ生き生きとした詩情を奏でだしてゐるやうに思はれる。

無邪気な微笑を浮かべてゐる

5

鈍魚庵

田中